

令和6年度岡崎市教育研究大会レポート

1 15A 特別支援教育 (小)

岡崎市立羽根小学校 可知 実希

2 研究テーマ

友達との関わりを大切に、工夫して取り組むことができる児童の育成
～自立活動「すなおタウン作り」の実践を通して～

3 研究概要

(1) 主題設定の理由

本学級は情緒障害クラスで5名の児童(2年3名、4年1名、6年1名)が在籍している。どの授業も意欲的に参加しているが、特に工作の時間が好きでそれぞれ自由な発想で自分の作品にひたむきに取り組んでいる。生活面では、1学期はお互いに不満に思っていることを言い合ってしまう、喧嘩になる場面が度々あったが、2学期になってからは勉強を教えたり、休み時間に一緒に遊んだり優しい言葉を掛け合ったりする姿を少しずつ見ることができてきた。

友達と活動する楽しさを感じてきている一方で、個々で活動することの方が多く、お互いに助け合ったり、共有したり、見比べてよりよい考えを見つけたりする様子はなかった。また、一度作品が完成するとそれだけで満足してしまい「さらによいものになりたい」という思いがもてず、試行錯誤しながら取り組む姿はあまり見られなかった。

そこで、児童が好きな工作を通して、友達と仲良く関わったり、教え合ったり、試行錯誤する中で、よりよい方法を見つけたりすることができるようになってほしいと考えた。さらに、自分で作り上げた喜びと、友達と関わり合いながらやり遂げた達成感を味わってほしいと願い、研究主題を「**友達との関わりを大切に、工夫して取り組むことができる児童の育成**」とし、本研究を進めることにした。

(2) 目指す子どもの姿

①【友達との関わりを大切にする】

自分の考えだけでなく友達の考えも受け入れ、協力していく中で仲良く活動し、新しい考え方を見つけることができる子ども

②【工夫して取り組むことができる】

思いや願いをもち、それを叶えるために試行錯誤し、主体的に活動に取り組むことができる子ども

(3) 仮説と手だて

仮説Ⅰ<友達との関わりを大切にする>

学習のゴールを設定した上で、友達と関わり合いながら、友達の作品と自分の作品を見比べたり、助け合ったりする活動を取り入れれば、友達と仲良く楽しみながらよりよい方法を見つけることができるだろう。

【手だて①】すなおタウンの建設

それぞれが作ったダンボールハウスを並べて、街を作っていくことを計画することで学習のゴールを明確化し、活動意欲を高めていく。

【手だて②】タブレット端末の活用

自分や友達のいいところをタブレット端末(主にスクールタクト)を活用して整理することで、お互いの考えを共有しやすくなる。

【手だて③】ペア活動の推進

ペア活動を導入し、一人では作るのが難しいところを協力したり、助け合ったりする中で協働作業を促進していく。

仮説Ⅱ<工夫して取り組むことができる>

身近な素材を活用することで「何か作ってみたい」「もっとやってみたい」という思いや願いをもち、その思いや願いを解決するために支援したりヒントを与えたりすることで、試行錯誤しながら主体的に活動に取り組むことができるだろう。

【手だて④】ダンボールハウス作り

大きなダンボールで一人一つ家を作ることで「自分の家をもっとよくしたい」「こんな素敵な家を作りたい」という思いをもたせ、創意工夫への意欲を高めていく。

【手だて⑤】素材の準備と活動場所の確保

学校の近くで拾ったどんぐりや、学校や家で余っている様々な大きさの段ボール、ラップの芯など身近にある素材を十分に用意し、素材と思いきり遊ばせる。また、一人一つダンボールハウスが作れるような十分な場所を確保する。

【手だて⑥】自力解決を支えるお助け支援

子どもの思いや願いに寄り添ったヒントを与えたり、一人では難しい作業では具体的な創作活動を支援したりする。

(4) 抽出児童について

児童A…自分の興味のあることには、自分なりの思いや願いをもって一生懸命取り組むことができる。図工が得意で、豊かな発想で素敵な作品を作る。一方で、友達の意見や作品には興味がなく、一度完成してしまうとさらによいものにしようという意識は少ない。また友達が作ったものに対して「下手くそ」などと言ってしまい、特に児童Bとトラブルになることも多い。本単元を通して友達のいいところを見つけたり、友達の意見を聞いたりしながら友達と関わることの良さを実感し、どうしたら自分のダンボールハウスがもっと良くなるかを考えられるようになってほしい。

児童B…負けず嫌いで、1学期はできないことや苦手なことがあると泣いて怒ることもあったが、褒めながらできることを増やしたことで自信が付き、できないことも根気強く取り組むことができるようになってきた。一方で、自由に発想することが苦手な教師に頼りきりになってしまうことも多い。また、休み時間は一人で過ごすことを好み、授業中はクラスの子に「うるさい」など嫌な言い方をしてしまい、友達との関わりも少ない。本単元を通して、教師ではなく、周りの友達の様子を見ながら、自分がやりたいと思ったことを形にしたり、工夫を考えたりし、主体的に活動する楽しさに気付いてほしい。また、友達と話したり活動したりする場を増やし、友達と関わる楽しさを実感してほしい。

(5) 単元計画 (11 時間完了)

時間	学習課題	学習内容	手だて
1～2	ダンボールであそぼう	・集めた素材で作りたいものを作る。 ・カッターナイフの使い方を知る。 ・ダンボールハウスの作り方を知る。	手だて③ 手だて④ 手だて⑤ 手だて⑥
3	ひょうさつを作ろう	・ダンボールハウスに付ける表札をどんぐりを使って作る。	手だて⑤
4～5	ダンボールハウスをしんかさせよう	・ダンボールハウスの外装を飾り付けする。 ・ダンボールハウスの中に置く家具や家電を作る。 ・新しい部屋を作る。 ・すなおタウンを建設するという目標をもつ。	手だて① 手だて③ 手だて⑤ 手だて⑥
6	じぶんのダンボールハウスのいいところを見つけよう	・自分のダンボールハウスの写真を撮る。 ・自分のダンボールハウスのいいところをスクールタクトで共有する。	手だて②
7	友達のダンボールハウスのいいところを見つけよう	・友達のダンボールハウスのいいところの写真を撮る。 ・友達のダンボールハウスのいいところをスクールタクトで入力する。	手だて②
8～10	もっとダンボールハウスをしんかさせよう	・前時までに入力したスクールタクトを参考にしながら、新たに作りたいものを作る。	手だて③ 手だて④ 手だて⑤ 手だて⑥
11	すなおタウンをたんけんしよう	・それぞれが作ったダンボールハウスを並べ「すなおタウン」を建設する。 ・「すなおタウン」を探検する。	手だて①

4 実践経過と考察

(1) 第1時～第2時「ダンボールであそぼう」

2学期の中頃、段ボール遊びを行うことにした。当初は段ボールで自由に遊ぶ、としていたが、特別支援学級の他のクラスが段ボールで家を作っているのを見て(資料②)子どもたちが「僕たちも段ボールで家を作りたい」と言ったことから、同じ教室である8組・9組で1人1つのダンボールハウスを作ることにした【手だて④ダンボールハウス作り】。

1人1つのダンボールハウスを作るにあたって、まずはカッターの使い方を説明したが、初めてカッターを使うことに対して児童Bは不安そうにしていた。資料③にあるように、ダンボールハウスの扉の形を2種類示し、どちらか1つを選ぶように伝えた。児童Aも児童Bも右側の形の扉を選んだ。いきなりカッターで切ってしまうのではなく鉛筆で下書きをするように伝えた。また、下書きの線を全部切ってしまうのではなく、片側だけ残しておくことと扉の形になることを実践した(資料④)【手だて⑥自力解決を支えるお助け支援】。実践後、早速たくさん用意したダンボールの中から、自分の家にしたいものを1



資料②他クラスの段ボールの家で遊ぶ児童



資料③ 扉の形を示したもの



資料④ 完成した扉

つ選び、扉を作っていくことにした【手だて⑤素材の準備と活動場所の確保】。

児童Aは段ボール遊びを楽しみにしていたため、教師の実践の後扉を黙々と作り始めた(資料⑤)。1番に扉が完成すると、嬉しそうに教師に見せに来了。扉をよく見ると、左上に鉛筆で点を書いてあ



扉を作る児童A

手伝う児童A

資料⑤児童Aの活動の様子

授業記録

A35: 次は何しようかな。
T62: Cさんはカッター使うの難しそうだね。
T63: Aさん、カッター使うのすごく上手だったよね。あつという間にできちゃったし。やり方を教えてあげたらいいと思う。
A36: Cさんと親友だし、僕がやってあげた方が早く終わりそうだから僕がやってあげるよ。Cさん、貸してみて。

つたため、何か聞くと「ここに糸電話を付けて、他の家の人と通話できるようにしたい」と話した。たくさんの素材を目の前にしたことで児童Aの発想が早速膨らんでいったのである【手だて⑤素材の準備と活動場所の確保】。扉が完成し、手持ち無沙汰になっていた児童Aに他の子のお助けをするように頼むと(資料⑤) A36の通りに快諾し、児童Cの代わりにカッターで扉を作ってあげていた。これをきっかけに、児童Aと児童Cは二人で家を合体させ、大きい家を作ろうと話していた【手だて③ペア活動の推進】。児童Aと児童Cのダンボールハウスの間に『廊下』を作り、ガムテープで貼って繋げた(資料⑥)。この廊下は、箱の両側にカッターで穴を開けてある。児童Aと児童Cのダンボールハウスの扉の反対側にも同様に穴を開け、資料⑦のように段ボール同士を繋げていた。また児童Aは児童Dが作っている家を見て「僕たちも屋根を作ろう」と児童Cに提案し屋根を作ることにした。最初は資料⑦の児童Cの家のように、段ボールの切れ端をつなぎ合わせて屋根にしており「光がすごく入ってくる」と言っていたため資料⑦の児童Aの家のように1つの段ボールで屋根を作るのを手伝った【手だて⑥自力解決を支えるお助け支援】。ここで、授業の時間は終わってしまったのだが、まだやりたい児童Aは、休み時間を使って廊下の屋根を貼り付けたり、素材からチェーンソーを作ったりして活動を楽しんでいた(資料⑧)。児童Aが自分で作ったダンボールハウスを気に入り、普段の勉強は全くやる気がないがこの日は「ダンボールハウスの中で漢字をやる」と言い、いつもは1ページを嫌々やっているが、この日はダンボールハウスの中で4ページもやっていた。



資料⑥ 児童Aが作った廊下



資料⑦ 児童Aと児童Cの家

児童Bは、手先が不器用なためカッターを怖がっていたが、教師と一緒に扉を切ると自信が付き、その後はほとんど1人でやれるようになっていた【手だて⑥自力解決を支えるお助け支援】。どんな家を作りたいか聞くと「お城のような家」と答えたので、大きいダンボールを二つ選びダンボールハウスを作っていた。児童Bはカッターで切ったところがボロボロになってしまうため、その部分をガムテープで貼るなど、ペースは早くないが、細かい所まで根気強く取り組んでいた(資料⑨)。児童Bは自由に発想することが苦手なため、ガムテープを付ける作業が終わると何をしたらいいかわからず困っていた。自分のダンボールハウスは気に入ったようで、何度も入っていたが、友達のダンボールハウスには興味がなく、「入ってみようよ」と教師が誘っても入ることもしなかった。児童Aと児童Cと一緒にダンボールハウスを作っている様子や、8組・9組の他の子たちが数人で関わったり、家をつなげたりしている様子を見ても「私は先生と作るからいい」と言い、友達と関わる様子はなかった。



資料⑧ 児童Aが作ったチェーンソー



資料⑨ 児童Bの活動の様子

(2) 第3時「ひょうさつを作ろう」

ダンボールハウスを作り始めてから、休み時間はダンボールハウスに入るなど自分のダンボールハウスに愛着をもっている姿が見られた。そこで、1年生が秋見つけのときにたくさん拾ってきてくれたどんぐりで文字を作り、表札にした【手だて⑤素材の準備と活動場所の確保】(資料⑩)。

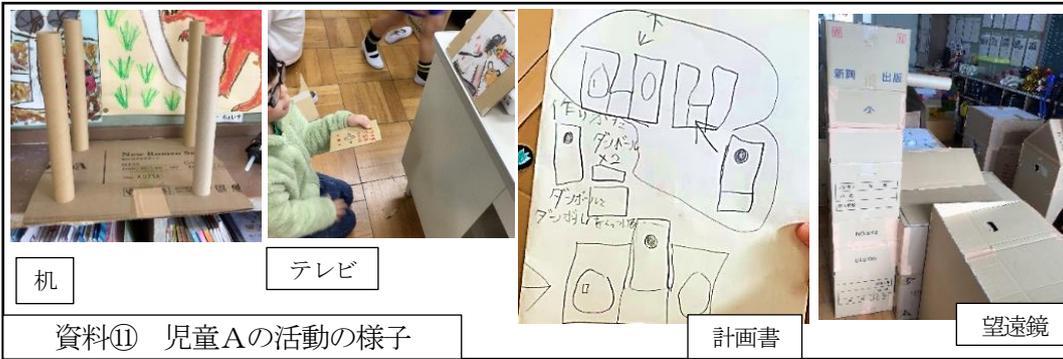
(3) 第4時～第5時「ダンボールハウスをしんかさせよう」

第1時、第2時でダンボールハウスのおおまかな外枠ができた子どもたち。第4時からは、子どもたちの意見から外装や家具を作っていくことにした。

児童Aは、素材コーナーにあるラップの芯を見て机を作り始めた【手だて⑤素材の準備と活動場



資料⑩ どんぐりで作った表札



C22: 段ボールの高さってこれくらい?
 A45: ちょっとCさん中入ってみて・・・どう?
 C23: 先生、ちょっと低いかな。
 T57: Cさんの膝が曲がってるからもう1個段ボールを繋げた方がいいかも。先生も手伝うよ。
 A46: できた。これならちょうどいい高さだ! 望遠鏡はどの辺につけよう。ちょっと入ってみる・・・先生! ここ! ここが目のところ! ここに穴開けてください!(段ボールの中から叩く)
 T58: Cさん、ここに穴開ける?
 C24: (頷く) カッター持ってくる。

【手だて①】(資料⑪)。ラップの芯と段ボールが接着剤で中々つかず「できない」と怒っていたがグルーガンで付けてあげると喜んで【手だて⑥自力解決を支えるお助け支援】。次に段ボールの切れ端を見つけて、テレビを作り始めた。完成するとリモコンでテレビを操作する様子を見せてくれた(資料⑪)。次に、休み時間に児童Cと一緒に考えて書いた望遠鏡の計画書を見て望遠鏡を作り始めた(資料⑪)。この望遠鏡は前時に作った廊下に繋がっており、児童Aの身長に合わせた高さになっている。覗き穴の部分はラップの芯で作っており、資料⑫のA45やT58の通り児童Aが立ち上がった時にちょうど目の位置に来るように児童Cと協力して調整して作っていた。今まで工作の時間はほとんど1人で黙々と作っていた児童Aだったが、児童Cと2人で1つの家を作り始めたことにより、友達と仲良く会話しながら協力して活動する姿を見ることができた【手だて③ペア活動の推進】。



資料⑬ 児童Eのダンボールハウス

児童Bは「かわいいお城みたいな家を作りたい」と思っていたが、何をしたらいいかわからず固まっていた。しかし、特別支援学級の他のクラスの子が資料⑬のようなダンボールハウスを作っているのを羨ましそうに見ている姿から「Eさんのように飾りをたくさん付けたかわいいダンボールハウスを作ってみよう」と提案すると嬉しそうに頷いた。児童Bは模様の付いた折り紙を持っていたため、折り紙をダンボールハウスの外側に貼っていくことにした。「模様があるのとないのを交代で貼っていこう」と自分なりに工夫をしてきれいにできるように作成していた(資料⑭)。しかし、貼った折り紙がめくれているのを見て、児童Bが「もうやりたくない」と言い出したため「貼るときに折り紙のふちを丁寧に糊で付けるといいよ。先生と一緒に頑張ろう」と声をかけて一緒に作業を始めると落ち着いて活動に取り組むことができた【手だて⑥自力解決を支えるお助け支援】。その後は「屋根にも貼ろうかな」と自分からやりたいことを見つけ、取り組んでいくようになった。また、他の児童に「きれいだね」と褒めてもらえたことで、本人の自信にも繋がった。この頃、クラスの他の児童は2～3人でダンボールハウスを作っていたが【手だて③ペア活動の推進】児童Bだけ1人で作っていた。児童Bにも友達と関わる楽しさも知ってほしいと思い、お姉さん



資料⑭ 折り紙を貼る児童B

として下級生に教えるのが好きな児童Bに資料⑮のT76「教えてあげてほしいな」と助言し、児童Fとダンボールハウスを合体するよう促した(資料⑮)。【手だて③ペア活動の推進】。児童Bは、児童Fの家に穴を開けるのを手伝ったりガムテープで貼るのを手伝ったりして、友達のために協力する姿を見ることができた。また、今までは自分のダンボールハウスには誰も入れなかった児童Bが「BとFさんのおうちにきていいよ」と他の児童を家に招き入れていた。

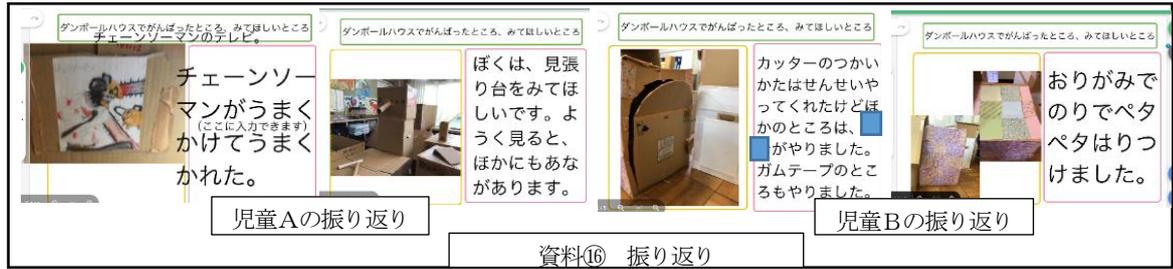
T75: Bさん、おうちがすごくかわくなったね。
 B17: 先生ここ見て。メロンの折り紙。
 T76: いいじゃん! かわいい!
 Bさん、Fさんが1人のおうちだから、Bさんのおうちとつなげてもいい? FさんにBさんがお姉さんとして色々教えてあげてほしいな。
 B18: 全然いいよ! Fさん! ここにおうち持つてきなよ! Bのおうちの中も入っていいよ。中も広いよ。

資料⑮ 授業記録

ある児童が「たくさん家があって街みたいになった」と言い出した。そこで、級訓である「すなお」から「すなおタウン」と名付け、すなおタウン建設を目標にしていこうとした。【手だて①すなおタウンの建設】。

(4) 第6時「じぶんのダンボールハウスのいいところを見つけよう」

第6時は国語として、自分のダンボールハウスのいいところや頑張ったところを見つける活動を行った。タブレット端末でダンボール



ハウスの写真を撮り、スクールタクトで共有した【手だて②タブレット端末の活用】。児童Aは、前時に作ったテレビと見張り台(望遠鏡)を、児童Bは、時間をかけて作った扉の部分と、折り紙の部分頑張ったところとして挙げていた(資料⑯)。

頑張ったところを入力した後、共同閲覧モードで他の児童が何を書いているのかを閲覧できるようにした。すると「〇〇さんのこれいいね」などといった呟きが聞こえてきた。振り返りを共有したことで、自然と友達と関わる形になったのである。さらに児童Aが「Bさんの折り紙きれいだね。」と発言したことで、児童Bも「Aさんの望遠鏡もすごいよ」と発言し、お互いに褒め合っていた。普段は口論になってしまう2人であるが、このすなおタウン建設によって2人の関係が少しずつよくなってきていると感じた。児童Bは「みんな仲良しなすなおタウンにしたい」と話していた。

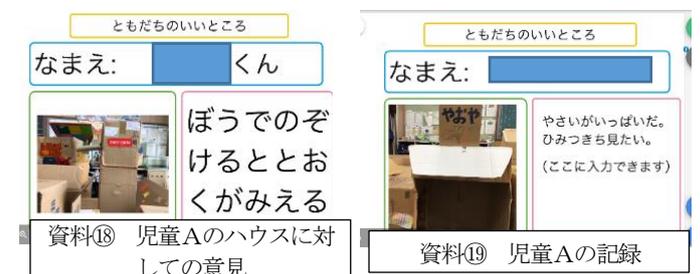
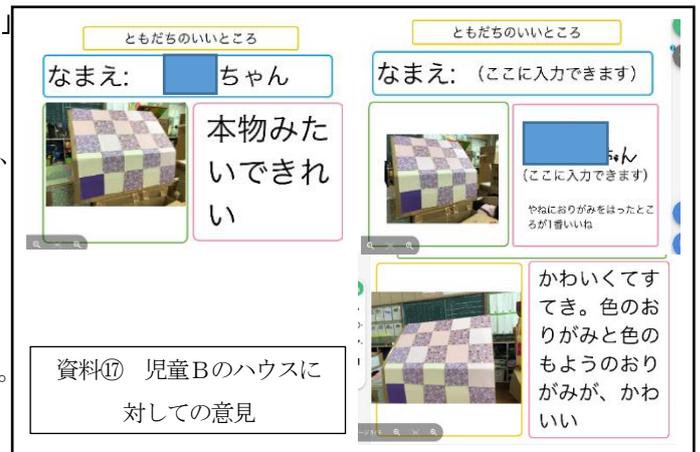
(5) 第7時「友達のダンボールハウスのいいところをみつけよう」

今回は写真だけでなく実際に友達のダンボールハウスをじっくり見る時間を作り、スクールタクトを使っていいところを見つけることにした【手だて②タブレット端末の活用】。資料⑰にあるように、児童Bのダンボールハウスは大好評だった。コツコツとダンボールハウスの屋根の部分に模様が付いた折り紙と無地の折り紙を交互に貼っていた児童Bはみんなに褒めてもらい、嬉しそうであった。

児童Aのダンボールハウスも『望遠鏡がある』という唯一無二の個性があり、その点がいいところとして挙げられていた(資料⑱)。

児童Dは、『すなおタウン』という名前が決まってから「街だからお店がある」といい自分のダンボールハウスを八百屋にして、おままごとで使う野菜のおもちゃを店頭並べていた。児童Aは児童Dのダンボールハウスについて「秘密基地みたい」とスクールタクトに書き(資料⑲)、「僕は薬局を作りたい」と話していた。

友達のいいところを見つけたことによって、どの児童も「もっとダンボールハウスをパワーアップさせたい」という思いがさらに出てくるようになった。友達のいいところを見つけ、褒め合うという活動がクラス全体の雰囲気の良いものになっていた。



(6) 第8時～第10時「もっとダンボールハウスをしんかさせよう」

児童Aは前時に言っていたように児童Dの八百屋を参考に、自分のダンボールハウスを薬局にし始めた(資料⑳)。扉とは反対側に窓を開け、その上に「くすり やっきょく」と書いた看板を貼っていた。

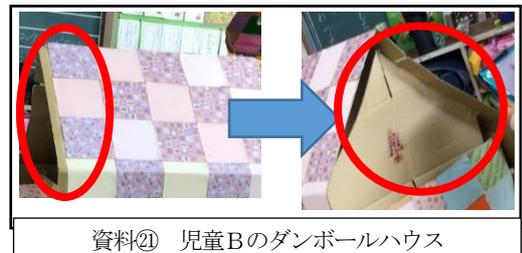
児童Bは、始まってすぐに「屋根から光が入るのが嫌だからふさぎたい」と教師に相談してきた。実践が始まってすぐは何をやればいいのか分からず固まっておき、教師に頼りきりの児童Bだったが、初めて自分で「こうしたい」という思いをもって相談してきたのだ。そこで、段ボールの切れ端で資料㉑のように光が入ってしまう部分をふさいだ【手だて⑥自力解決を支えるお助け支援】

児童Aは、第1時(P3)で言っていた糸電話をいよいよ作ることにした。児童Bのダンボールハウスと糸電話を繋げる約束をしたらしく、自分の紙コップは、児童Aが好きな緑色で塗り、児童Bの紙コップには「Bさんの紙コップはかわいくした方が喜ぶと思うから」と言ってピンクでハートを書いていた(資料㉒)。それを見た児童Bは喜んでた。たこ糸を紙コップに付けて糸電話が完成したがどのように家に取り付けばいいのか迷っていた。そこで、資料㉓にあるようにT54で「段ボールに穴をあける」とヒントを与えると【手だて⑥自力解決を支えるお助け支援】、すぐに作業に取り掛かっていた。そして、資料㉔のように、糸電話が児童Aの家と児童Bの家でつながった。糸電話がつながると児童Aと児童Bはすぐにダンボールハウスの中に入り、2人で会話を楽しんでいた。「電話が開通した」と児童Aは大喜びであった。児童Aが発想した糸電話は大成功だった。2人は授業後に振り返りで「本当に電話ができるように頑張った」「大成功でした」と書くなど、糸電話が成功した喜びを表していた。(資料㉕) 以前はお互いに言い合うような関係だった2人だが、協力して作業を行い、2人で喜び合う姿は印象的であった。

児童Aの糸電話を見て、ある児童は余っていたラップの芯を家同士繋げて、楽しんでいた。子ども達は、糸電話とラップの芯の電話を交互に行い、遊んでいた。今までは、個々で活動する姿が多かった子ども達であったが、ダンボールハウスの実践を通して、友達の作品に目を向けたり、友達と協力して作品を作ったりして友達との関わりを大切にする姿を少しずつ見ることができてきた。



資料⑳ 児童Aの薬局



資料㉒紙コップに色を付ける児童A

- A25: 扉のここ(右上)に紙コップを貼りたかったけど、(段ボールの)中からだと段ボールが邪魔で紙コップのところから話せない。せっかく糸電話やりたかったのにもうだめだ。
- T54: 扉の右上に穴を開けたら段ボールの中からも糸電話ができるんじゃないかな。
- A26: たしかに! Bさん、Bさんの家にも穴を開けてもいい?
- B15: (少し迷って) せっかく折り紙貼ったんだけどな...
- A27: でもダンボールハウスの中で電話ができるようになるんだよ!
- B16: そっか。それならいいよ。

資料㉓ 授業記録

(7) 第11時「すなおタウンをたんけんしよう」

ダンボールハウス作りを初めてから、ダンボールハウスに愛着をもち、自分のダンボールハウスで過ごすだけでなく自分のダンボールハウスに友達を入れるなど友達と関わり合いながら楽しんでいた。



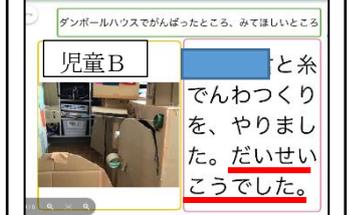
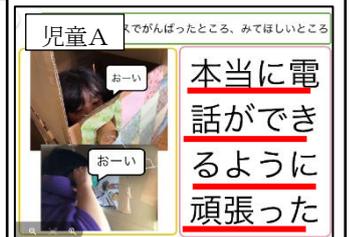
資料⑭ 児童Aが作った糸電話

すなおタウンには、3人が住む大きい集合住宅、薬局と望遠鏡がある児童Aと児童Cの家、児童Bと児童Fのお城のような家、八百屋と一軒家が繋がっている建物、迷路と巨大すごろくが付いた家がある。これらの家を並べて、すなおタウンを探検することにした。子ども達は、自分のダンボールハウスを友達に紹介したり、友達のダンボールハウスの中に入ったり、お店で買い物したりして大いに楽しんだ。友達とトラブルになりやすかったA。友達との関わりが少なく、教師に頼りがちであったB。すなおタウンの実践をしていく中で大きく成長していった。そして2人の姿は教師の心の中に温かい感動として刻まれていったのである。

5 研究の成果と終わりに

(1) 仮説Ⅰに対する手だての検証【友達との関わりを大切にする】

【手だて①すなおタウンの建設】…(第2時) (P 3 L34) 児童Bは友達と関わろうとしなかったが、(第5時)「すなおタウン」建設を目標にしたことで、(第6時) (P 5 L 5)「みんな仲良しなすなおタウンにしたい」という意識をもち、資料⑭⑮⑯⑰のように児童Aと児童Bで協力する姿があった。(第7時) (P 5 L15) (資料⑱) 児童Dが「すなおタウン」という名前から街にお店を作ったことにより、(資料⑳) 児童Aが新たな考えを見つけることができていた。



資料⑳ 児童の振り返り

【手だて②タブレット端末の活用】…(第6時) (資料⑳) (P 5 L 1) 振り返りの共有で自然と友達と関わる形になり、児童Aと児童Bが褒め合い、仲良く楽しむ姿を見ることができた。(第7時) (P 5 L17) いいところを見つけ、整理していく中で児童Aは児童Dの「八百屋」を挙げ(資料⑱) 児童Dの考えを元に「薬局」という新しい考え(資料⑳) を見つけることができていた。

【手だて③ペア活動の推進】…(資料⑤) 授業記録T63のように、児童Aに児童Cの手伝いを頼んだことで、(資料⑥) P 3 L13の廊下作りや、(資料⑪⑫) P 4 L 3の望遠鏡作りのように二人で協力し、仲良く活動する姿を見ることができた。(資料⑮) T 76のように、児童Bに「教えてあげてほしい」と言ったことで他者と関わるができなかった児童BがP 4 L24のように友達のために協力したり、仲良く関わったりする姿を見ることができた。

以上から、手立て①②③が有効であったと考察でき、仮説Ⅰが実証されたといえる。

(2) 仮説Ⅱに対する手だての検証【工夫して取り組むことができる】

【手だて④ダンボールハウス作り】…1人1つのダンボールハウスを作ったことで、それぞれが自分のダンボールハウスに愛着をもち「もっと素敵な家にしたい」という思いや願いをもつことができていた。児童Aは資料⑪のテレビや机、そして資料⑭の糸電話、児童Bは資料⑱のように外装にこだわるなど自分だけの個性あるダンボールハウスを工夫して作る事ができていた。

【手だて⑤素材の準備と活動場所の確保】…素材を十分に用意したことで、子ども達はその素材から発想している場面もあった。資料⑤P 3 L 8のように、児童Aはたくさんの素材を見て糸電話を作りたいと考えていた。また、資料⑪の机は、素材コーナーにラップの芯が4本あったことから想起していた。

【手だて⑥自力解決を支えるお助け支援】…特に、特別支援学級の児童は児童によってできることやできないことが大きく異なるため、それぞれに合わせた支援を行った。手先が器用で自分でどんどん発想できる児童Aは、こちらが支援をしすぎると怒れてしまうため、P 3 L18 資料⑦の屋根作りや、(P 4 L 1) 資料⑪の机作り、資料⑫T57、資料⑬のように問題解決のためのヒントを与えたり、1人では作業が難しいところのみ手伝った。一方で、手先が不器用で発想も中々難しく、きちんとできていないと怒ったり泣いたりしてしまう児童Bには、P 4 L11の児童Eのダンボールハウスを参考にしようという提案、P 4 L15の糊付けについての声掛けのようにこまめに声をかけたり、P 3 L28の扉作り、P 5資料⑳のようにある程度こちらが手伝ったりして、児童Bを褒めながら自信をつけ、自分1人でできることを増やしていった。子どもに合わせた適度な支援を行ったことで、自分の思いや願いをもちながら活動に取り組むことができた。

以上から、手立て④⑤⑥が有効であったと考察でき、仮説Ⅱが実証されたといえる。

(3) 終わりに

今回の実践を通して、特別支援学級の児童は特に個に合わせた支援が必要であると改めて感じた。児童がやりたいと感じたことは児童1人ではできるものではなかった。1人1人の児童のよさを生かし、できないことも個に合わせた支援を行いながら少しずつできるようにしていくことで生き生きと活動できていた。また、教師1人が支援をするのではなく、友達と補い合うことで思いや願いを実現できるのだと感じた。今後も、児童が自らの思いや願いを実現できるような魅力のある授業実践を目指していきたい。